

水泳 4選手にも贈る

二本松市と同市体育協会の全国スポーツ大会出場選手激励金交付 式は八月三十日、市役所で行われた。初回の全大会に臨む「シルバ

二本松野球クラブ」と、福島市を中心にした女子ソフトボールク

阪市で開かれる第十三回全日本選抜遠征軟式野球大会に出場する。平成七年に結成され、平均年齢は六十六歳。

高橋清、佐藤健治、鈴木章義、上田洋一、井上雅男、善方義治、斎藤徹、安斎一恵、沼倉庄次郎、真弓五郎、根本義夫、太田義秋、安斎貞夫、鎌谷昌久、山本要二

高放射線量調査希望世帯 市職員出向き測定

福島市、きょうから

福島市は一日から放射線量が高く詳細な調査を希望する世帯に市職員が出向き、個別に放射線量を測定する事業をスタートする。

市は町内会を通して各世帯に簡易型の線量計を貸し出しているが、高い放射線量が測定された地域の住民から再調査の要望が多く寄せられていた。より正確なデータを測定し市民の安心につなげようと測定を決めた。

対象は住民による自主測定で毎時二回以上(地上二層)を計測した世帯。今後、除染を予定している世帯からの希望も受け付ける。

測定は、市職員が3742へ。

電話024(525)

夏休み開始時比25人増

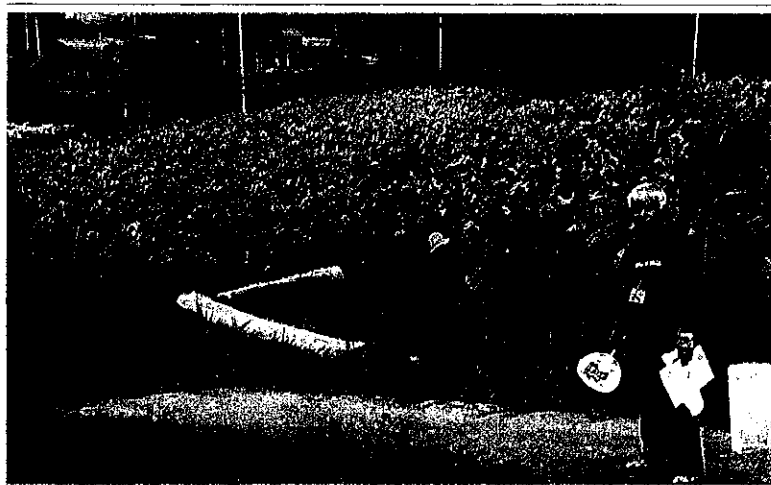
区域外就学の公立小中生

福島市に住民票を置いていたまま市外の学校に通う区域外就学の公立小中学校の児童生徒は、夏休み開始時と比較し、八月二十八日現在の

福島市に住民票を置いていたまま市外の学校に通う区域外就学の公立小中学校の児童生徒は、夏休み開始時と比較し、八月二十八日現在の

転出先は山形県が最も多く、県内他市町村や新潟県の学校に通う児童生徒が多くを占めた。

市は「放射性物質への不安が大きいと考えられる。教育施設などの除染を進め、放射性物質の心配のない環境



美しい花を咲かせたヒマワリと安田さん

水田にヒマワリ1万本

福島市の安田義昭さん宅近く

福島市山口中入(安)が自宅近くの水田に植えたヒマワリがこのほど見頃を迎えた。

安田さんは五月、所有する水田約五千平方メートルに約一万本の苗を植

えた。原発事故を受けた放射線物質への対策として稲の代わりに栽培を決めた。

近所の住民も美しいヒマワリに見入り、安田さんは「花を楽しんでみんな元気になってほしい」と願っていた。

が思い切り体を動かしながら講師の増田忠俊さんを紹介した。

作を贈った。

参加した年長の菅

福島、伊達の中2 職場体験

福島民報社 社内見学し取材



見出し付けや紙面のレイアウト

福島、伊達両市の中2年生の職場体験が始まり、福島民報社など市内の各事業所で仕事の大切さを学んでいる。

福島民報社には清水中の三人、西根中の二人、梁山中の二人が二

NPO法人まごころサービス福島センターは「こども緊急サポートネットワーク」事業のスタッフ養成研修会の受講者を募集している。次世代を担う子育て家庭を地域で支えることが目的。

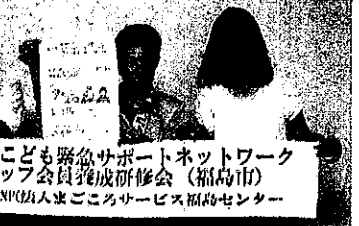
育てスタッフ養成

まごころサービス福島センター

修会受講者を募集

間。各日とも午前十時から福島市のチェンバ大町内にある市民活動サポートセンターで開く。

保育や小児看護、栄養などの基礎知識を専門家から学び、病気や障害のある子ども



司会者(左から)須田さん、河野さん、掛ける(右から)須田さん、河野さん

まごころサービス福島センター

原則として全講座受講可能で、子どもが好きな心身に健康な人が対象で、資格や経験などは問わない。定員は三十人。

受講料は無料、テキストのため福島民報社を訪れ、大勢の参加と子ども

申し込み、問い合わせは事務局 電話024(592)2270

河野知義さんはPRの事務局長の須田弘子さん、佐藤由紀子さん、

販売、総務など新聞の業務全般を体験している。八月三十一日編集局で見出し付け紙面のレイアウトなどを見学し、新聞製作を学んだ。実地研修として、市内のグリーンパレスや中

延べ1,165名です。

受け入れ県や受け入れ先の方々の温かで親切な対応は、私たち伊達市民への大きな励みです。これに添え、皆で明日へ向って力強く歩みたいものです。

■伊達市への応援

【第24号】平成23年8月25日発行

今年の夏休みは、多くの家庭で家族で出かける機会が増え、子ども同士や家族のきずなをより深めるよう努めたと聞きます。放射線の影響から子どもたちの活動は制限されましたが、そのなかでサマーキャンプに参加した子どもたちは思いっきり屋外で活動をしました。草原で駆けまわっての遊び、グラウンドでサッカー、プールで水泳、キャンプ場でバーベキューなど。就寝時は友達が隣にいる楽しさ、興奮で眠れない夜を過ごしてきました。

キャンプから帰った子どもたちの様子を「ご家族に何うと」自分のことを自分でするように話した。洗濯までしている。家族とよく話すようになった。手伝いをするようになった。家族にやさしくなり、ありがたうと言うようになった。言いつけや話を素直に聞くようになった。など、故郷を遠く離れ伊達市と違う土地での生活は、子どもたちの貴重な経験となり、大きく成長したように思えます。

滞在先で子どもたちの世話をしていた方からのお手紙で、考えさせられた内容についてご紹介します。

『キャンプ中、小さな物音や揺れに敏感になっている子どもたちの姿を見ました。怖い思いをしたことが分かり、子どもたちの心の痛みや精神的なショックの大きさが笑顔の奥に垣間見え、心が痛みました。5日間のキャンプの中で、つかの間でも子どもたちに楽しいと感じてもらい、これからの生活を乗り切る支えになって頂けたなら幸いです。笑顔いっぱいの子ともたちと接し、今後も福島の子ともたちを応援し続けたい気持ちを一層強くいたしました。伊達市はまたまだ様々な問題が山積している、皆様のご苦勞は察するに余りありますが、伊達市は必ず震災前以上の素晴らしき市になると信じております。』

このように伊達市を応援し、私たちの頑張りを期待してくれている人々が本当に大勢います。多くの方が伊達市を見ています。私たちは今まで以上の伊達市をつくっていかねばなりません。